# また逢う日まで

木花もみじ

　沙都子の背中がせわしなく動く。キビキビとしっかりと。この子は本当に成長したと思う。まだ幼い小さな身体なのに、それらを一生懸命使ってもう弱音を吐かないために努力している。
「お洋服は全部詰めましたですか？」
「ええ、大丈夫ですわ。わたくしの分は全部入れましたわ」
「忘れ物、しても大丈夫なのですよ？すぐ取りにこれますです」
「･･･そうですわね。別に遠くへ行くわけじゃない･･･」
　気合を入れて準備をしていたのだろう、その気合を挫くようなことを言ってしまった。遠くから様子を伺っていた羽入がそわそわしながらも「ボクにお手伝いできることはありますか？」と聞いてくる。沙都子は大丈夫ですわと答えると他に積まれたダンボールを確認して、とはいっても２、３個なのだが―明日への準備が整ったことを確認した。
「さ、梨花。明日は朝早くからどたばたさせてしまうんですから今日は早く寝ますわよ？」
「みぃ。わかりましたなのです。お布団敷いて寝ましょう、羽入も準備するですよ」
「あぅ･･･」

　沙都子はひとり洗面所へと向かい、顔を洗って歯磨きをしてるのがわかった。その間に私と羽入は布団を押入れから出して、埃を恐れずに敷き詰めていく。元々二人分しか布団はないので羽入と私はいつも同じ布団に寝ている。
「梨花、本当にこれで良いのですか？･･･寂しくないのですか？」
「寂しくないわけないじゃない」
　手にしていた布団を握り締める。この布団に包まれて、何回、何十回、何百回、この部屋で沙都子と夜を越したのだろう。時には沙都子が、私が寂しさや苦しさ、自分の罪の深さに苛まれてこの布団を何度濡らしたことだろう。
「でもね、羽入。あの子は本当に頑張ったの。努力した。信じた。だから今こそ本当の幸せを手に入れることができるのよ。大事な友達の幸せを願わないなんておかしいじゃない」
「あぅ･･･」
　何かを口にしたげな羽入のおでこにピンッと人さし指を弾く。べちっなんて少し痛々しい音がして羽入はびっくりした様子で痛そうにおでこを抱えた。
「はうっ！？り、り、梨花ぁ！痛いのです、痛いのです･･･！デ、デデコピンは禁止なのですよ！」
「だってあんたもうキムチ食べても効果ないじゃない。だから今度からはデコピンでお仕置きすることにしたわ」
「なんでボクがお仕置きされなければいけないのですかぁ！ひどいのですひどいのです！」
　そこへ沙都子が戻ってくる。騒ぐ私たちを見てもう夜遅いんですのよ！と怒っているような怒っていないようなそんなわからない声で叱ると早く顔を洗って歯磨きしてきてらっしゃいなと言った。洗面所は小さいので私一人で。おでこを叩かれた羽入は大きいまんまるな瞳を潤ませながら布団の上で暫く動けなそうだったし。

「羽入、洗面所が開きましたですよ。顔を洗って歯磨きをして寝る支度をするのです」
　梨花が洗面所から出てくると、羽入は沙都子ににっこり笑いかけて、じゃあいってくるですと洗面所へと向かった。
　羽入と入れ替わるような形で私は布団へ戻る。隣にいる沙都子は心なしか嬉しそうにしている。その理由はなんとなくわかる。羽入が知らない間に諭してくれたのだろう。もう彼女は本当に無力な存在ではない。私が足りない部分を補い足して、自分自身も欠けていた部分を埋めようと必死に動く。かけがえのない仲間の一人なのだ。
「さ、寝る準備しましょう。電気を消しますですよ」
「え？まだ羽入さんが･･･」
「大丈夫ですよ、羽入は夜でも眼が利くのできちんと戻ってこれますです。にぱー☆」
　昔は壁だって抜けられたのですよーと言いそうになったが黙っておく。
　なんだか沙都子と二人きりで待っていたら、寂しさが募りそうで。今日がこうやって一緒に寝るのが最後だと思うと私だって寂しくなる。だからもう布団を引っかぶって、寝るフリをしてしまおうと思ったのだ。
　私が布団を被って寝息を立てるフリをしていると、沙都子が私の髪をゆっくり撫ではじめたのがわかった。私は手をぎゅっと固めて掴んで、訪れてくる感情を押し殺そうと必死になった。
「梨花、もう眠ってしまいました？」
「みぃ･･･」
　やはり寝たフリはできない。最後なのだから。話をしなくてはいけない。コチ、コチと目覚まし時計が刻む針の音が悲しく聞こえる。
「つかぬことをお伺いしますけれど･･･梨花は･･･今、幸せ？」
「みぃ？」
　いつもはしない沙都子の質問だった。幸せであるとか不幸せであるとか。そういったことは口にしないのが私たちだった。それはお互いにわかっているから。何が幸せで何が不幸せなのかには人によっての基準があって必ずしも他人のものさしで計るべきものではないからだ。
「私は･･･とても幸せですのよ。ううん、梨花とここで暮らし始めてからとても幸せだった。圭一さんが引っ越してきて、もっと毎日が楽しくなった。羽入さんが増えて、さらに楽しくなった」
「みぃ。ボクもなのですよ」
　布団から顔を出して、沙都子の表情を伺う。消してしまった電気のせいでよく見えない。
「ワガママかもしれないんですけれど。やっぱりここを出ていくのは寂しい。梨花と一緒に暮らしてた日々を失うのはやっぱり辛いんですの･･･」
　暗闇の中で、月夜に反射して涙が零れていくのがわかった。沙都子は泣いているのだ。
「ボクと過ごした日々は失ったりしないですよ。思い出の中に生き続けます。沙都子とボクが覚えている限り」
　もぞもぞと布団の中で動きながら、そっと沙都子に近づく。その背中に自分の鼻を押し当てる。沙都子がそれに気づいて、自分の方へと顔を向けてくれる。眼を真っ赤にして、小さく開いた口からは八重歯が見える。
「沙都子。もう一度聞きますです。沙都子は今、幸せですか？」
「･･･幸せですわ･･･」
「だったら大丈夫なのです。ボクの幸せは沙都子の幸せなのですよ。沙都子が幸せなら、ボクも幸せなのです」
　そういっておでこをぴったりくっつける。それから頬を優しく撫でて、零した涙がなぞった跡を拭いてやる。
「泣いちゃだめなのです、沙都子が悲しいとボクも悲しいのです。沙都子にはずっと、ずっと･･･笑っていてほしいのですよ」
「梨花･･･」
　ぎゅっと抱きしめあう。ここで一緒に暮らそう、そう決めたときもこうやって抱きしめあった。家族を失い、途方に暮れていた二人はお互いに生きることの意味を見出そうとここで生きようと決めた。
　そして私は何百年も何千年も繰り返す運命に抗うために、沙都子は兄が戻ってくるのを信じて強くなることを誓った。
　だから今、私たちがこうして幸せを喜び分かち合うことは至極当然のことなのだと―それを沙都子には気づいて欲しかった。

　羽入が戻ってくる頃には自然と私たちはお互いの手を握り締めながら寝息を立てていた。羽入は真っ暗闇の中一生懸命布団に戻るのが大変だったらしい。

　次の日の朝。
　元気のいい仲間達の声が聞こえてくる。今日は日曜日だ。そして、今まで加わることを許されなかった仲間が一人。
「沙都子、聞いてくださいよー！悟史くんったら引越しの日間違えてたんですよ？今日朝迎えにいったらまた寝ててですねー」
「むう･･･別にそういうことは沙都子に言わなくても･･･」
「まったくにーにーはやっぱり私がいないと一人で朝も起きれないんですのね」
　悪戯っぽく沙都子が笑う。目の前にはずっと帰りを待ちわびていた兄の姿がある。北条悟史。入江診療所で入江の懸命な治療を受けてようやくこうしてみんなの前に姿を見せても大丈夫なくらいに回復した。
　そして、ようやく沙都子といっしょに北条家に帰ろうと、一緒に暮らそうということになったのだ。
　悟史の部屋は沙都子が悟史が帰ってくるまで時々手入れをしていた。あそこには苦しい思い出や辛いことがたくさん詰まっているかもしれないが、悟史と沙都子が帰る場所はやはりあの場所なのだ。
「あれ？そういえば圭一くんと魅ぃちゃんは？二人も遅刻なのかな？かな？」
　レナがあたりを改めて見渡して、この中に圭一と魅音がいないことに気づく。詩音がはぁーっと肩を落としてお姉も圭ちゃんもですかあ？と呆れた声で言ったがすぐに「二人そろって遅刻ってことはどっかでいやらしいことでもしてたんじゃないですか？」とつけ加えた。相変わらず減らない口だ。
「し、詩ぃちゃんそういうことは沙都子ちゃんや梨花ちゃん、羽入ちゃんがいる前でいわないほうがいいと思うなっ思うな？」
「だってそうじゃないですか！レナさんにも内緒で･･･くぅ、お姉やるぅ。私も悟史くんと色々進めないとなぁ･･･」
「詩音、だめだよ･･･そうやって魅音をからかって。可哀相だろ？圭一だって･･･」
「もぉ！悟史くんはいっつもそうやってお姉をかばうんですからー」
　こうやってたくさんの仲間達が揃うのはやはり楽しい。そこに悟史がいることがもっと嬉しい。皆の笑顔が見れることがたまらなく嬉しい。私がにっこり笑っているのを見て、羽入もにっこりと笑う。そこへ待ちわびた声がようやく聞こえてくる。
「うぉぉぉーー前原圭一ぃっ！！遅刻ぎりぎりで参上ぉっ！おい、魅音っ！ちゃんとついてきてるんだろうなぁ！」
「任せて圭ちゃん！ちゃんと乗ってきたから！！」
「ってぇうぉおお！！なんか重いと思ったらお前が乗ってたのかぁぁあああ！」
　相変わらず騒がしいこのコンビ、何かと思ったら圭一がリヤカーを引いて、魅音がその後ろに乗って現れた。そういえば足をつれてくる！っていうのは魅音の役目だったはずだ。しかしなぜリヤカーなのか･･･。
「ちょっとお姉。どうしてリヤカーなんですか？フツウ引越しっていったら軽トラックとかでしょ。運転手は葛西に頼めばいいんだし･･･空気読んでくださいよ」
「あっるぇ？だってこっちの方がすぐに持ってこれるし、圭ちゃんが引いてっちゃったから･･･止めようがなかったんだよねえ。あっはっは」
「なんでお前が荷台に乗ってるのか俺はそのほうが疑問だ！後ろから押せっていったじゃねーかよー！」
「なあにー？おじさんに力仕事しろっていうのー？圭ちゃんさあ昨日の部活で負けたじゃん？だからこれ罰ゲームね、罰ゲーム」
「ぬわんでまだ昨日の罰ゲームが尾引いてんだよっ！」
「はうっ･･･リヤカー引く圭一くんかぁいいよ☆はう☆レナがおんもち帰りぃっ♪」
「はぁぁぁ！？レナっ、ちょっめっやめぇぇうぁうｙｇｗｒたｙｇｗｒじｗこｌｐ；@」
　この二人が来るだけでこんなに周りが騒がしくなる。悟史は呆気に取られていたが、沙都子の笑顔を見て嬉しそうに微笑んでいた。
「さて！諸君。今日の部活はだなぁ、梨花ちゃんちから沙都子が引っ越すことになった！なのでそのお手伝いね。皆、気合を入れてお手伝いをするように！誰か質問ある人いるー？」

　いつの間にか魅音が指揮を執るような形でいつもの部活モードになっていった。私は素直に感じた疑問をぶつけようと手をあげた。
「はいはい梨花ちゃん！」
「今日は部活なのですか？だとしたら罰ゲームがあったりするのですか？」
「くっくっく･･･梨花ちゃん･･･いい質問だねぇ･･･くっくっく」
　魅音の曇った鬼のような声にその場にいる全員が凍りつく。ただの引越しの手伝いなのに罰ゲームがつきまとうってどういうことだよ！と圭一の声が聞こえた。相変わらず自分の心の声が筒抜けの男だ。
「まったくお姉はなんでも勝負事に変えちゃうんですから･･･何するつもりなんですか？」
「引越しそのものに罰ゲームはないよ？私だってそこまで鬼畜じゃないんだしさ。まあ、引越し終わったら発表するからそのつもりで励んでくれたまえ！」
「はぁ？なんだそりゃ」
「はう・・・なんか怖いね？魅ぃちゃんが何考えてるのかさっぱりわかんない」
「魅音さんはいつも何考えているのかわかりませんわ･･･」
「魅ぃは何も考えていないと思うのですよ。頭は空っぽなのです」
「ちょっと！！聞こえてるよー！！」
　いつにも増して辛辣な部活メンバーのコメントに魅音が怒るのも当然だ。悟史がオロオロしながらも、沙都子に「さ、皆に迷惑かけちゃうと悪いから早く準備しよう」と声をかける。
「と、いってももう荷物は支度してありますからリヤカーに積むだけなんですのよ」
　しっかり者の妹がいると兄は楽ができる。そっか、と悟史が言うとダンボールを運び出しに部屋と駆けていった。あ、手伝いますよーと悟史に吸い寄せられるように詩音がついていく。
　圭一もよおし運んでやろうじゃねえかと腕まくりをしてさらに続く。魅音とレナもあとから駆けていく。
「これだけ大勢いますとボクたちがやることがないのでは･･･」
「あら羽入、あんた手伝わないつもり？」
「あうっ？ボクだって手伝いますですよ！？そんなズルするつもりないのです！」
　羽入も慌てて部屋の中に入っていく。すでにダンボールを持って悟史がでてくるのにすれ違うとさらに慌ててボクも手伝うのですー！と声をあげて駆けていった。
　さて、私もダンボール以外に沙都子と悟史が新しく生活をはじめるのに必要なものをまとめておいたのだった。それを出してあげないと。
　案の定、引越しはあっという間に終わってしまった。ダンボールを積み込み終わり、沙都子が気を使って部屋を一通り掃除していった。そんな必要はないと断ったがあの性格だ、きっちりと整理していって、ようやくリヤカーを引いて北条家に向かうことになった。
　北条家も今では悟史が一人戻って暮らしているが、汚れが酷いところも多い。今度は引越し先で掃除をしたり荷物を置いたりとそっちの方が忙しかったりするのだ。
　私もそっちへ行って手伝うことになっているのに、沙都子が何やら心配そうな顔をして色々と確かめてくる。
「寝る前にちゃんとガス栓は閉めるんですのよ？」
「あ、玄関の鍵はちゃんとかけてまして？」
「梨花、時々窓に腰かけてるときがありますけどあれ危険ですわ！やめてくださいまし！」
「キムチの買い置きが最近なくなってましたけど平気ですの？」
「ええと、ええと、それと、それと･･･」
　周りは何も言わずに沙都子が言いたいことを言わせてやる。だがやがて魅音が沙都子の肩をぽんぽんと叩いて諭してやる。
「沙都子ぉ、あんた大事なこと忘れてない？」
「えっ？ええ？私まだ梨花に言ってないことありましたっけ？ええと、えええと･･･」
「違う違う。そうじゃなくて」
　魅音が笑いながら続ける。
「ここは雛見沢だってことだよ」
「え？」
「遠い国に行くんじゃないんだから。ここは雛見沢だよ？それに学校だってある。帰りに家に遊びにいってもい

いんだし、遊びにきてもらっても大丈夫だよ。誰も咎める人はいない。いつだって逢えるんだよ」
「あ･･･そ、そ、そうですわね･･･」
　皆が笑い出す。圭一が「沙都子、何だか嫁にいく娘を心配する母親みてえだったぞ」と言うとまだ周りがどっと笑う。
「梨花ちゃん」
　悟史が一歩前に出る。沙都子の頭を撫でながら、そしてその頭をゆっくりと下げさせて自分も頭を下げた。
「僕がいない間、沙都子の面倒を見てくれて本当にありがとう。これからもどうか、沙都子のことを宜しくね。それから困ったことがあったら遠慮なく言ってね。頼りないかもしれないけど、僕たちでよければ力になるから」
　ゆっくりと頭を下げて、それからあげた悟史の顔は。あの時と変わらない悟史の顔だった。前の沙都子は悟史の背中に隠れて怯えているだけだった。それが今はこうして一歩前に出て堂々としていられることができる。
「面倒を見てもらってたのは私の方。沙都子のおかげで毎日が楽しかった。嬉しかった。かけがえのない時間を沙都子は私に与えてくれた。だから私に言わせてほしい。本当に･･･ありがとう」
　一生逢えないわけじゃないというのもわかっている。まだいつでも逢える、魅音が言った意味もわかる。でも沙都子と悟史は一度引き離されてしまった。いつでも逢えるというのは気休めの言葉にしかならない。でも今度はきっと間違えない。やり直せる。だからその言葉も嘘っぱちだなんて思わない。
「沙都子んちに行けばいいんだろ？俺が引っ張っててやるよ！」
「あ、圭一、僕も引いていくよ！」
　悟史と圭一の二人がリヤカーを担いで前へ進もうとする。レナと魅音、詩音がそのリヤカーを後ろから押していく。特別に重いわけではないが皆で運んでいくことに意味があるのだ。
「梨花ちゃんと沙都子、羽入はリヤカーに乗っちゃえよ！なんか押してもらうのも怖いしなあ･･･沙都子なんていつの間にか車輪に巻き込まれてそうだし･･･」
「な、何ですってー！圭一さんこそへとへとに疲れてリヤカーに轢かれても知りませんわよ！」
「だぁれが轢かれるかよ！よし、悟史！俺たちの本気を見せてやろうぜ！行くぞぉぉ！」
「ちょ、ちょっと！圭一、そんなに慌てなくても！！」
　舗装されていない雛見沢のでこぼこ道を一気に駆け抜ける。神社の階段をさすがに下りるのは危険なので遠回りをして緩やかな坂道を選ぶ。後ろに続くレナ、魅音、詩音が「ちょっと！急ぎすぎだよ！」と声をかけるが一度火をがついた圭一は止まらない。
「1500秒で沙都子んちについてやるぜぇぇぇぇぇ！」
　がたがたと揺れるリヤカーの上から見る二人の背中。圭一と悟史。二人の兄が一緒になって沙都子のために駆けていく。
　笑い声が雛見沢全体を包んでいく。心と心が繋がって、世界に広がり全てを包み込む。

　大事なものはどこにあった？
　いつもそばにあった。

　誰もが望んでいたものはどこにあった？
　ほらすぐにそばにあった。

　誰だって幸せになる権利を持っている。
　だから心配しないで、手を広げて。

　あなたの笑顔をいつまでも見ていたい。
　みんなの笑顔をいつまでも見ていたい。

　それが私の幸せだから。